

青少年アンビシャス運動 100 人委員会は、麻生福岡県知事から委嘱を受けた県民各界のメンバーにより、平成 12 年 2 月発足しました。

私たちは、青少年の現状・課題、アンビシャス運動の内容・運動の方法につき、この 1 年間集中的な議論を重ねました。また、県民を交えた数多くのシンポジウムの開催、県民からの提案募集、アメリカにおける現状調査等を行いました。幸いにして、福岡県民の青少年教育に対する関心は極めて高く、多くの県民の参加と各種の提案がありました。

今回、これまでの当 100 人委員会の論議の成果を中間報告として集約しましたので、知事に対し、県民運動に関する具体的な提案をいたします。

「前向きに物事に取り組む意欲の低下」とか「各発達段階に応じて身につけるべき基礎的な社会規範の学習不足」、「家庭や地域の教育力の低下」など、青少年とそれを取りまく現状は、誠に憂慮すべき状況にあると言わねばなりません。

私たちは、このような厳しい現状認識のもと、今こそ青少年の健全育成を県民挙げて取り組むべき課題であると認識し、この提案を行うものであります。

今、一番求められているのは、まず子どもたちが自らそれぞれの目標を見つけ、それに向かって努力するという意欲です。

そして、大人たちには、子どもたちとともに、すばらしい未来をつくるという前向きな姿勢が求められます。

この提案を踏まえて、県民各位が創意工夫し、青少年とともに目標の達成に挑戦していただければ幸いです。

時あたかも、国においては、教育改革国民会議が設置され、戦後教育を見直し、21 世紀の新しい教育理念と方法を見いだす動きにあります。青少年の育成は、まさに国を挙げての課題なのです。

「天性を見だし、育成に努める」をかけ声に、この「青少年アンビシャス運動」を家庭、地域、学校、企業が一体となって速やかに推進されるよう強く願っています。

2001年2月6日

青少年アンビシャス運動 100 人委員会
会長 江崎 玲於奈

第1章 「青少年アンビシャス運動」の目指すもの

1 青少年を取りまく環境

(1) 青少年の現状

あいさつができない。公共の場での基本的なマナーが守れない。自分が家族の一員であることが実感できない。友達と遊ぶことができずひとりでテレビやテレビゲームに浸っている。こういう子どもが多くなっています。

また、学校では不登校やいじめ、学級崩壊といった問題も生じています。

非行の低年齢化、凶悪化、薬物の乱用も大きな問題となっています。夢や目標が持てず前向きな意欲に欠けた子どもや責任を持って職業に就く意識が希薄な青年も増えています。

(2) 家庭や地域社会の教育力

戦後、倫理や社会規範に関する教育を軽視した結果、親は子どもを叱ること、誉めることをしなくなっています。また、核家族化などにより、世代間で子育ての知恵が伝えられなくなりました。その結果、親は子育てや教育について自信を失っています。

地域での人間関係の希薄化や少子化による地域の子ども仲間の消滅、テレビゲームの普及や学習塾通い、過度のテレビ視聴などにより、子どもたちは外で遊んだり地域の人々と接する機会を失っています。地域の人々から気軽に声をかけられたり、叱られたり、教えられたりすることもなくなりました。子どもたちが自由に遊べる路地裏や空き地なども減りました。

(3) 学校の教育力

これまで学校でも「平等」ということが重視されてきました。しかし、「平等」ということが結果に差をつけないという「結果の平等」になりすぎると、子どもたちは頑張ろうという意欲を持てなくなります。子どもたちが自分の能力を見つけ高めていくためには、学問に限らず、芸術・スポーツ・ものづくりなど、いろいろな分野で競いあえる機会を平等に与える必要があります。

欧米では、生徒が積極的に意見を述べる「考える授業」により、子どもが主体的に育っています。我が国においても、このような授業をもっと活発に行う必要があります。

学校は、家庭や地域とは違った意味で、社会生活の基本的なルールや社会規範を教える好適な場であると考えます。

2 社会の大きな変化

(1) 情報化

インターネットなど情報技術は、私たちの日常生活にとって欠くべからざる道具となってきました。

しかし、情報機器を介した過度の「バーチャル体験」は、五感による直接体験の不足を招き、他人を思いやる心や命の尊さに対する正常な感覚を薄れさせる危険性をはらんでいます。また、各種犯罪の誘因にもなっています。

(2) グローバル化

経済のグローバル化によって企業は世界の中で試練にさらされており、そこで働く人々もまた厳しい競争と自己責任を求められています。雇用形態も非常に多様化し、今までのような終身雇用、年功序列のシステムが崩壊しつつあります。

社会や企業、行政等が求める人間像も、学歴・肩書重視から「何を学んできたか(学習歴)」や「何ができるか(能力)」を重視する方向へと大きく変化しています。

(3) 完全学校週 5 日制

平成 14 年(2002 年)4 月から公立学校の「完全週 5 日制」が実施されます。

家庭や地域の教育力の低下が指摘されている中で、休日における子どもたちの過ごし方は真剣に検討すべき課題です。完全学校週 5 日制の趣旨は、家庭での対話や親子のふれあいを増やし、地域でのさまざまな体験活動を通じて視野の広い子どもを育てていこうということです。

しかし、家に閉じこもってテレビを見たり、テレビゲームに没頭する、あるいは、学習塾に行く回数が増えるだけということになりかねません。完全学校週 5 日制の目的を達成するための環境整備とマンパワー(ボランティア)への配慮などが必要です。

3 青少年アンビシャス運動の目指すもの

以上のような青少年を取りまく環境や社会の変化を踏まえ、今私たちが失いつつある家庭や地域の教育力を取り戻し、全ての青少年が新しい時代をたくましく生きていけるように、社会をあげて取り組むことは喫緊の課題であり、それが「青少年アンビシャス運動」にほかなりません。

すなわちこの「青少年アンビシャス運動」は、「豊かな心、幅広い視野、それぞれの志を持つ(アンビシャスな)たくましい青少年の育成」を目指す福岡県の県民運動です。

ここで、

・「豊かな心」とは

自らに誇りを持ち、他人を思いやり、自然や美しいものに感動するなど毎日の生活を豊かに楽しく過ごすことができる心を持つことです。この「豊かな心」は、世代を超えての大人との交流や友達との楽しい遊び、豊かな自然体験などを通じて育まれます。

・「幅広い視野」とは

自分と社会との関係についてしっかりした考えを持ち、グローバルな視点を身につけることです。この「幅広い視野」は、本を読み、多くの人とつきあい、世界の青少年との交流

や「他流試合」を通じて育まれます。

・「それぞれの志を持つ(アンビシャスな)」とは

自分の目標を見つけ、それに挑戦し努力していくことです。

「志」があれば、たとえ失敗しても子どもたちはその経験を生かして自ら成長していきます。この失敗を社会が大らかに見守り、子どもたちが大きく伸びていくよう支援することが大切です。

4 青少年アンビシャス運動展開の3原則

青少年アンビシャス運動は、次の3つの原則に従って推進するべきだと考えます。

(1)「誉めて伸ばそう」の原則

これまで我が国においては、あまりにも「結果の平等」が重視され、伸びていこうとする子どもたちの意欲を弱めてきました。青少年アンビシャス運動は、「結果の平等」の考えから脱却し、子どもたちの持つ可能性を大きく引き出すものでなければなりません。

子どもたちが目標を見だし、それに向かって努力し成しとげたときに誉められることで達成感や自信が育まれます。それを糧に子どもたちはさらに伸びていきます。

この運動の基本は、子どもたちの前向きに生きていく意欲や行動を積極的に誉め、自立を促すと同時に個性と能力を伸ばすよう支援していくことにあります。

なお、子どもたちが悪いことをしたようなとき、愛情を持ってきちんと叱ることは、誉めて伸ばすことに劣らず重要です。

(2)「自主的参加」の原則

青少年アンビシャス運動は、青少年健全育成を県民全体で具体的に取り組むものです。そのため、この運動の目指すものに共感し推進しようとするグループや組織・団体が名乗りをあげ、自主的にこの運動に参加することが基本です。また、この運動の推進方法の一つとしては、公募方式として参加証を発行することなども考えられます。さらに、この運動には、大人だけでなく青少年も自主的・積極的に参加することが期待されています。

(3)「交流・評価」の原則

この運動を活性化するためには、参加するグループや組織・団体がそれぞれの成果や経験について情報を交換し、新たな発見やノウハウを得て、お互いの向上を図ることが大切です。そのためには次の2つのことが望まれます。

1) 地域ごとまたは運動テーマごとに集まって「活動報告会」を定期的を開催すること。

2) 参加したそれぞれのグループや組織・団体が自らの設定目標をどの程度達成できたかにつき定期的に(原則として2年ごと)調査し、評価すること。

なお、ここでいう評価とは、それぞれの活動がどれだけ浸透したか、あるいは、それら

の実践活動によって子どもたちがどう変わったかなど、その成果を客観的に振り返ることです。

また、趣旨にかなう活動をし、立派な成果を挙げた個人や団体に対しては、これを顕彰することも考えられます。

第2章 子どもがアンビシャスになるための12の提案

1 提案の内容

県民の方々から寄せられた800件以上の貴重な意見を踏まえ、私たち100人委員会では今後の青少年育成のあり方について鋭意検討してまいりました。その結論として、私たちは家庭・地域・学校・企業などで直ちに取り組むべき12の提案を行います。

福岡県は、それぞれの地域で個性と特色があります。そうした地域の実情に合わせて、以下に述べることを手がかりにまずできることから始めましょう。

(1) まず、大人が意識を変えよう

あいさつや基本的なマナーを守ることができない子ども、自分が家族の一員であることが実感できない子どもが少なくありません。

これは、大人自身にも責任があります。まず、大人が意識を変える必要があります。

そのため、地域社会や職場研修などで親や大人の役割、子どもを育てるための知識を学ぶことが極めて有効であると考えます。

たとえば：

- まず、大人が自らの生活を見直し、子どもに手本を示そう。
- 地域や職場で父親学習や子育て研修などに積極的に取り組もう。
- 少なくとも週に一度は家に早く帰って子どもといっしょに食事をしよう。
- 少なくとも「家庭の日」（第3日曜日）は家族といっしょに過ごそう。

(2) 「うち」の家庭教育をそれぞれつくろう

家庭は、すべての教育の出発点です。保護者は、それぞれの家で子どもたちがきちんとした生活習慣を身につけられるよう根気よくしつけなければなりません。

共働きや単身赴任などで忙しい保護者が増えています。一方、テレビゲームの普及や子どもが自分の部屋を持つようになったことなどにより、親子の会話が少なくなり、家族のつながりも希薄化しています。そのため、保護者は意識して子どもたちと向き合うことが必要です。

子どもの言い分を安易に受け入れるのではなく、善悪の判断を教えたりお互いに話し合う機会を持つなど、保護者が今一度、子どもに対する自分の責任を自覚し、我慢すること

も教え、しつけや育児に取り組むことが必要です。

たとえば：

- せめて食事のときはテレビを消すなど、家族で落ち着いて話をする機会をつくろう。
- 十分な睡眠をとり規則正しい生活をするのは自立の出発点です。早寝早起きの習慣を身につけさせよう。
- それぞれの発達段階にふさわしい栄養を子どもがきちんと摂れるようにしよう。
- 家族の一員としての責任と自覚を持たせるため、家事の手伝いなどを分担させよう。
- 子どもの良いところを見つけ、しっかり誉めよう。悪いことをしたらきちんと叱ろう。
- それぞれの家庭で「うちの教育方針」を作ろう。

(3) 乳幼児期から「社会力」をつけよう

100人委員会の論議を通じて、人格形成の基礎は乳幼児期に培われることが改めて大きくクローズアップされました。乳幼児期のさまざまな体験が人間の人格形成の土台になります。人間の人格を高層ビルに例えると、乳幼児期はまさに基礎工事の時期に当たります。やがてその上に築きあげられるはずの構築物を基底で支える基礎工事をゆるがせにしてはなりません。乳児期に惜しみない愛情や多くの語りかけ、スキンシップを与えることによって「基本的信頼関係」を育むことができます。また、幼児期には友達といっしょに外で思いっきり遊ぶなどさまざまな体験をすることによって、子どもの「社会力」(人と人とのつながりや社会を作っていく力)が磨かれます。

そのため、親が乳幼児期の育て方をしっかりと理解し、実践する必要がありますが、核家族化の進展や最初の赤ちゃんを産んだ母親の過半数が子どもに触れた体験がないなどさまざまな体験や知識が不足し、育児不安などストレスが高まっています。こうした状況の中、親同士で子育ての知恵を出し合うグループ活動や経験豊かな「先輩」の知恵を活用することが効果的です。保育園・幼稚園には、乳幼児を育てる多くの経験が蓄積されています。この知識や経験を地域社会に還元することが期待されます。

たとえば：

- 保育園、幼稚園は、地域における子育て相談センターとしての機能をさらに強化しよう。
- 乳幼児の定期検診や保育園の入園式などの機会には「赤ちゃんに愛情と豊かなスキンシップを与えること」、「幼児を外で友達と思いっきり遊ばせること」、「誉め方、叱り方」などをみんなで学ぼう。
- 高齢者は、その豊かな経験を生かし、地域の育児アドバイザーになろう。

(4) 地域ぐるみで子どもを育てよう

子どもたちは社会の宝です。子どもたちは、異年齢の子どもとの遊びや地域の文化・行事などへの参加を通して、あいさつをしたり、年長者とのつきあい方など多くのことを学

び成長するものです。しかし、今日ではそうした機会やつながりが薄れています。

アメリカでは、多くの人々が日常的にボランティア活動を行い、余暇にはクラブ・サークルなどに積極的に参加し、地域の中で子どもたちを育てています。

「完全学校週5日制」が平成14年度から始まります。共働き世帯が増えている今日、公民館や空き教室などを活用して子どもたちの交流の場を速やかに確保することが必要です。

たとえば：

- 公民館や空き教室などを活用し、子どもたちが放課後や休日に、友達と遊んだり、気軽に集まれる場所(たとえば「アンビシャス広場」など)を地域に作ろう。
- 地域の大人がボランティアとして参画し、子どもたちのさまざまな体験活動をサポートしよう。
- 地域で大人も子どももあいさつをしよう。
- 子どもが地域の中で友達を作るきっかけとなる大小さまざまなイベントを地域ぐるみで企画しよう。
- 子どもたちの自立や自主性を養うため、親元を離れての「通学合宿」なども積極的に増やそう。

(5) フロンティアに挑んだ先人たちに学ぼう

今の子どもも多くは、それぞれが将来どのような人間になりたいかについて、必ずしも明確な人物像を描きにくいといわれています。従って、「立派な人になりなさい」というような抽象論ではなく、具体的な人物像を示すことが効果的です。すなわち偉人のエネルギーや意志の強さ、新しいことに挑戦する喜びや尊さを学び、自分もまたそうした目標に向かって努力する意欲が湧いてきます。

たとえば：

- 演劇などの文化活動や野球・サッカーなどのスポーツ活動で地元や全国で活躍している人たちの志や努力に触れ、それを手本としよう。
- 偉人伝を読んだり、読書ボランティアなどの話を聞いたりして、目標となる先人、偉人を発見しよう。
- NHK番組「プロジェクトX」などのドキュメンタリーやノンフィクション番組などから、新しいことに果敢に挑戦した先人達のエネルギーとチームワークのすばらしさに学ぼう。

(6) 読書をしよう

自分の意見をしっかりと持ちつつ、他人とのコミュニケーションをするためには、日頃からしっかりした考え方や順序よく話すことが必要です。

そうした能力を養うのは読書です。読書により知識を得、考えを深めることができます。

読書は他人を思いやる心や自己の内面を見つめ直すまたとない機会です。

たとえば：

- 全ての学校で「10分間読書運動」などを実践し、読書を習慣づけよう。
- 読み聞かせなどにより子どもたちの読書活動をさらに広げよう。
- 交流会などで子どものための読書ボランティアを育成し、その輪を広げよう。

(7)自然を体験しよう

人間は自然と触れ合うことにより、自然の偉大さや自然に生かされていることを知り、謙虚さを学びます。同時に、自然環境を守ることの大切さも実感します。

また、自然の中で過ごすことにより、バーチャルリアリティでは味わえない本当の感動を体験し、困難に立ち向かう勇気を養うこともできます。

平成14年度から完全学校週5日制が始まります。これを活用して、子どもたちが登山や魚釣りなど自然体験をすることができるよう、大人が積極的に機会を作っていくことが大切です。さらに、子どもたちが動物を飼ったり植物を育てたりすることも大切です。

また、長期間自然の中で過ごすことは、困難に立ち向かう力を養い、子どもたちの心と体を鍛えることができます。そのため、子どもたちを自然に帰す仕組みを地域の大人たちの手で作る必要があります。

たとえば：

- 自然の恵みを実感できる農業、林業、漁業など多様な体験活動に参加しよう。
- 便利な日常生活から離れて自然の中で共同生活を行う、長期サマーキャンプなどに参加しよう。
- 自分の知恵と責任でワイルドに遊ぶ冒険遊び場（例えば「プレイパーク」）をつくろう。
- 子どもたちから上手に遊びを引き出し、かつそれを見守る「プレイリーダー」を育てよう。

(8)外国の青少年と切磋琢磨しよう

一般的に日本の子どもは、外国の子どもに比べて自分の意見を堂々と述べる力が不足し、物事に挑戦する体力、精神力も低下しています。そのことは、グローバル化が進んでいる今日、憂慮すべきことであります。

そこで、子どもたちを世界の子どもたちと交流させ、切磋琢磨させることが必要です。すでに県内市町村の中には海外に子どもを派遣したり、「アジア太平洋子ども大使」のホストファミリーになるなど、大きな実績を挙げているところもあります。このような取り組みをさらに拡大し、子どもたちの交流、「他流試合」などの機会を増やすことが重要です。

たとえば：

- 海外でのサマーキャンプを通し、世界の子どもと一緒に野外活動や文化活動を楽しむための「青少年アンビシャスの翼」を飛ばそう。
- 世界の子どもと囲碁やサッカー、ロボット・コンテストなどで対戦しよう。
- 外国の子どものホームステイを積極的に受け入れよう。

(9) 自らを鍛え、得意技を持とう

我が国は、グローバル化の中で世界との厳しい競争にさらされています。集団所属により安心感や誇りが維持された従来型の社会システムが、今や揺らいでいます。そのため、これからの若者にとっては、「学歴」よりも「何を学んできたか」、「何ができるか」が大切になります。

このような状況の中で、子どもには、自分にしかできない得意技を見つけ、たくましい個人として、国際社会で活躍できる能力が求められています。

学問に限らず、芸術・スポーツ・ものづくりなどいろいろな分野で目標を定め、自分を鍛え、自らの得意分野を伸ばすことが肝要です。

たとえば：

- 子どもたちがそれぞれ自己の目標を設定し、それに向かって挑戦する、いわゆる「目標宣言運動」に取り組もう。目標を達成した子どもを表彰し、失敗した子どもは励まそう。
- 子どもたちの創造性や社会性を育むため、子どもがチームをつくり、いろいろな分野の研究・活動を自主的に行うのを支援しよう。
- 得意技を発揮できるさまざまな分野のコンテストに挑戦する機会をつくろう。
- 子どもたちにやる気を起こさせるため、本県出身の有名人たちに出身校に来てもらい、体験談や得意技を生かした授業をしてもらおう。

(10) 社会体験やボランティア活動をしよう

社会は人々が支え合って成り立っています。

社会体験やボランティア活動は、その活動を通じて社会の一員としての自覚を一層促します。さらに、その活動を通じて、自主性を高め「社会力」を身につけることもできます。

また子どもたちは、「就業体験」を通じて、社会のしくみや働くことの意味・大切さを実感することができます。

そのため、さまざまな社会体験やボランティア体験の機会を作るとともに、中高生や大学生がリーダーとなってこうした活動に参画することが望まれます。

たとえば：

- 親の職場を見学し働くことの意味をかみしめよう。
- 農林水産業、ものづくりの現場などさまざまな職場での就業体験を増やそう。

○子どもたちが老人福祉施設への訪問や清掃活動などのボランティア活動に自主的に参加できるよう積極的に支援しよう。

(11)学校はアンビシャス運動の軸になろう

学校は、学習やさまざまな体験活動、日ごろの先生・友達との交流を通して、豊かな人間性を磨き、将来の社会的自立に向けて準備をする大切な場です。

そのため、一日の大半を過ごす学校での生活はとりわけ大切にする必要があります。

我が国の子どもたちは、自分の意見を堂々と述べ相手に理解させる技能に欠ける面があります。つまり、自己表現が苦手ということです。したがって、学校ではコミュニケーション能力を高めるための教育に力を注ぐ必要があります。

さらに、地域に開かれた学校を目指し、学校の情報や要望を家庭や地域に積極的に発信するとともに、校長をはじめ教職員が家庭や地域のニーズを的確に把握する必要があります。こうした諸活動を通じて、学校を軸とした家庭、地域、企業などの連携を深め、人間関係のより豊かな楽しい学校に飛躍することを期待します。

たとえば：

- 学校で「コミュニケーション能力を高めるための授業」を推進しよう。
- 社会で活躍する企業人、保護者、地域の人びとを積極的に招き、授業や交流を通して「生きた手本」にふれさせよう。
- 地域や企業の人たちも学校の行事に参加するなど積極的に学校に協力しよう。
- 留学生を招いて交流をする機会などをさらに増やそう。
- 学校はホームページなどを使って、保護者・地域・企業と情報を交換しよう。

(12)企業も大学も意識を変えよう

企業の役割は重要です。いまだに学歴だけで安定した生活が送れると思っている親は少なくないのが現状です。企業の経営者は、今や「学歴」重視から「能力」重視の世の中になったことや得意技の重要性などにつき社会に明確に発言する必要があります。

企業には、その土地や施設を地域に開放し、また保護者を家庭に「返す」ことも、求められています。

一方、大学の役割も重要です。アメリカ・南カリフォルニア大学では、地域と連携して子どもたちの放課後プログラムを実施したり、学生がボランティアとして地域に出てコンピューターの指導や医学的ケアを行っています。この活動により学生も大学で学んだことを地域で活かすことができ、地域もボランティアにより活性化します。我が国の大学でもこうした活動をより一層充実させることが望まれます。

たとえば：

- PTAの会合などで、企業人が求めている人間像などを明示しよう。

- 企業は幅広く学校活動に協力し、「職場見学」や「就業体験」の機会を積極的に増やそう。
- 大学は地域や学校との連携を深めるためのプログラムをさらに充実しよう。
- 大学は、学生のボランティア活動をさらに奨励しよう。

2 青少年アンビシャス運動に参加しよう ～運動の推進方法～

この運動は私たち100人委員会や県、市町村などの行政だけで進められるものではありません。これまでも青少年の健全育成のため、子ども会をはじめとする青少年育成団体やPTAなどさまざまな団体が自主的に取り組んできました。地域の教育力が衰退する中、これらの団体はもちろんのこと、青少年育成を目的とした民間非営利組織(NPO)など新たなグループの重要性も、さらに増しています。青少年アンビシャス運動を展開するためには、家庭、地域、学校、企業、そしてこれらグループや組織・団体の皆さんが連携し協力していくことが不可欠です。

グループや組織・団体また地域の活動には、それぞれの特徴があり、実践する方法もさまざまですが、『青少年を健全に育成する』という目的では一致しています。県民の皆さんが連携し協力すれば、必ずや目標を達成できるものと信じています。

具体的に運動を進めるにあたっては、地域やグループ、組織・団体のそれぞれの個性や特徴(得手)を生かして取り組んでいこうではありませんか。

そのため、次のような推進方法も検討してみてください。

(1)推進体制づくり

この県民運動を推進していくためには、その核となる組織として、知事をトップとする「青少年アンビシャス運動推進本部」を設置することが不可欠です。この「推進本部」は、民間団体、経済界、教育界、県などで構成し、県に事務局を置くことが効果的です。その際、市町村の役割はとりわけ重要であり、本部と市町村は十分連携を図る必要があります。市町村は、それぞれの個性と特色を生かし創意工夫して運動に取り組んでください。

この運動の基本は「県民の自主的参加」ですが、その参加を促し、それぞれの活動を実り多いものとするための方法を考える必要があります。その方法の一つとして、公募方式を採用することが効果的であり、具体的には、次のような仕組みを検討してください。

たとえば：

- ア 活動グループなどが本部に申し込む。
- イ 本部は活動計画を調査の上、アンビシャス運動の一環として適当と判断すれば、申込者に参加証を交付する(場合によっては、市町村等関係機関の意見を参考とする)。
- ウ 各活動グループは活動を実践し、2年ごと(原則)にその実績と成果を本部に報告する。
- エ 本部はこれを評価し、活動の更新または見直し等を行う。

オ 顕著な成果を上げたグループ及びこれに貢献した個人の顕彰を行う。

(2)活動報告会及び交流会

この運動を活性化するためには、参加するグループ・団体がそれぞれの活動の成果や成功・失敗の事例等を情報交換し、絶えず向上を図ることが必要です。そのため、地域ごと、運動テーマごとに集まる「活動報告会」は定期的に企画・実施されることが望まれます。

また、異なる分野のグループや組織・団体も異分野間で「交流会」を開催し、相互理解と連携を深め、一体となってアンビシャスな青少年の育成にあたる必要があります。

(3)青少年の主体的参加

この運動は大人だけに呼びかけるものではありません。私たちは、青少年の皆さんにも自主的、積極的に参加してもらいたいと期待しています。例えば、読書会、山や海へ行く会、農業体験、ボランティア活動などは、青少年諸君が仲間を募って実行する、などのような形で参加してほしいと思います。

(4)運動の「発振」

この運動は具体的行動を伴う県民運動であるため、広く「公論を興す」必要があります。また、家庭や地域、企業に運動のうねりを作る必要があります。このためには、まずアンビシャス運動のシンボルマークなどを作成しそれを活用することが有効と考えられます。

また、運動方針や活動団体の取り組みなどを紹介する「アンビシャス通信」の発行やインターネットによる情報提供及び情報交換を活発に行い、この青少年アンビシャス運動の輪が広がるよう「運動の発振」に努める必要があります。

(5)運動への財政支援等

この運動を多様な個人や団体が実施するに当たり、運動の内容によっては、ある程度の費用が必要となります。

運動の基本となる部分や先進的取り組みは公的なもので支えるにしても、各グループの活動費については個人、企業の寄付などによる「基金」を設け、それにより弾力的な支援を行う必要があります。

このため、「青少年アンビシャス運動を支援する会」（仮称）を作り、民間ベースで浄財を募ることが適切です。この募金に当たっては、運動の目的や資金の用途などを明示し、広く個人や企業に資金の提供を呼びかける必要があります。その際、支持する団体を指定して寄付ができるなど、支持者の顔が見える方策についても検討してください。

また、この運動の展開にあたっては、公民館、学校などの公共施設はもとより企業や個人が所有する施設の活用などの支援も必要です。